



Title	所感
Author(s)	阪田, 廣吉
Citation	懐徳. 1929, 7, p. 82-84
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88793
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

されて居る。即ち生島祭と足島祭と稱する主神である、生島とは生魂洲、足島とは足魂洲の事で、之れを現代的に譯すると、人間繁榮の主神と生産豊饒の主神とである、更に之れを要約すると、民族繁榮と國産豊富とを祈願する祭儀である、皇祖皇宗の昔より、傳統したる高遠美妙の理想として、民力の涵養と財政の充實とを圖り、國民の和平と其の福祉とを祈願させられたる大古の行事は、文化の今日に於ても、教化の爲め心あるもの、憧憬としてやまぬ所である。明治、大正、昭和の聖代は建國の精神に基き、國粹保存、古典復興の期である。希くば大典已修の翌年なる此の機會に於て、八十島祭の復活によりて大古の醇朴を宣べ、思想淨化に努めんとする事は何人も切望して已まざる處であらう。

畏くも今回行府の聖旨を按ずるに、第一は青年を親閲せらるゝ事と、第二は産業を奨励せらるゝ事とである。陛下登極に先ち令旨を賜ひ、國運進展の基礎を青年に置かせられ、青年は則ち國民の精粹で、國家の生命である旨を訓示し給ふた、今其の青年の代表十萬を青雲たなびく城東の野に親閲せられ、奉

公の大義を喚起し給ひたるは、全く生島祭の古精神に合致せるものにて、侍従を各種産業施設に派遣せられしは、全く足島祭の神事と何等軒輕なき事を看取する事が出来る。只、祭政時代と法治時代と其の形式を異にせるに過ぎぬ。

陛下曠世の大業を建てさせらるゝに、皇宗の威烈を不基とせられ、普く神靈の降臨に對へさせらるゝ勅教歴々たるものがある。陛下は常住不斷國利民福のため、神に祈願したまふものにして敬神尊祖の聖慮凜然たる詢に恐懼に堪へぬ所である。我等は今回の行幸を瞻仰し、其の精神に於て八十島祭の復興であると云ふ事を認識せざるを得ない、而して吾が大阪市は、民力に於ても産業に於ても、實に全國の中樞である所以を自覺し、市民の將來の負荷の重大なる感奮興起せなければならぬ事を高唱し、虔んで聖慮の高大無邊なるに感激する次第である。

○所 感

阪 田 廣 吉

今上陛下關西に行幸あらせられて、私は一層緊張味

味を深ふした、顧みれば私は十五歳の時、明治大帝が
橿原神宮御參拜の途次、堺市に行幸あり熊野小學校
天覽の際に、私は師範學校より同校の雇生徒に選ば
れ上等生徒の一隊に編入され、教場に於て親しく天
顔に咫尺し、兵要日本地理小誌論纂中の一節を講義
した、これがそも／＼私の天恩に浴した始めである
次に砲工學校卒業の時、卒業生五十二名を代表し、
恭しく御前に進みて天顔に咫尺し、御侍立の桂大臣
より證書を拜受した、之れが第二の光榮である、而
して今回復た今上陛下の拜謁を賜つた、何たる光
榮ぞ、私の終生忘るべからざるものである。

さて教化の醇厚は、聖上の夙に軫念し玉ふ所で、國
民皆此に反省し志を同ふして國體の健全を謀らば、
些々たる現代の現象の如き固より憂ふるに足らない
のである、兎に角國民擧つての反省でなくてはなら
ぬ、國民總動員は雷に破彈劍戟の戦争に於てのみ言
ふべきでない、思想對戰に於ける怨敵は、間を窺ひ
隙に乗せんとして居る、敵は囹圄を覺悟する眞劍味
を以て來りつゝある、之れに對抗するには、國民に

眞に慨世憂國の涙なくんば到底之れを防止し去るこ
とは出来ないのである、國民の反省が一日遅るれば
一日國家に不利である、此の點に於て此度の大阪行
幸は、大阪市民は言ふ迄もなく、近府縣の臣民に此反
省心を腦裏に深く印せしめられたるものと恐察し奉
るのである、

私は此度の行幸に就て釋然と心の解決を得たことが
ある、夫れは御親閱式並に觀兵式に於て、陛下が嚴
正なる直立不動の御姿勢で、一時間餘の長きに涉つ
て微動でもあらせられなかつた事は、實に神様なら
では出來得る業でない、達磨大師は面壁九年だとか
釋尊は檀特山にて脩業の際、頭上に鳥が巢くふたど
か眉毛に蜘蛛が絲を張つたとか云ふ、恐れ多いこと
ながら此度の陛下の御姿勢を拜して、神様のなさ
ることは同一轍だとスツカリ暗雲が晴れた、併し達
磨釋迦は胡座である、陛下は御直立である、彼此同
一の論ではない、且つ陛下が我々を教化せらるゝ、仁
慈の點に於ては、各種團體工場の御巡幸に於て立派
に證據立てられてある、誠に恐れ多い極みで、唯々

感泣に咽ぶのみである、

編者云、阪田氏は退役陸軍砲兵少佐にして現今は、在郷軍人會大
阪支部評議員及び豊崎青年團長たり、懷徳堂に聽講し去る昭和元
年十年精勤の好學表彰状を受く

○鳳輦を迎へ奉りて

稻 田 穰

産業御奨勵の有難き御思召に依る大阪行幸愈御着の
六月四日となつた、曉天の心地よき快晴は、我等市
民を狂喜せしめし上に、大手門前奉迎會場二萬五千
の市民有志は、早きは數時間前より會場に詰掛け、初
夏の強烈に光線直射されつゝも、御機嫌殊に麗はし
き御英姿に咫尺し奉り、自ら頭の下るを覺へざりし。

晴もはれ日本晴の御幸かな

萬歳の聲とよむなり奉迎式

難波江のあしきやまひはかれはてゝ

今日のみゆきにあふそたふとき(兼子)

唯だ茲に聊か將來の誠としたきは舉行次第に見ゆる
如く、萬歳三唱市長發聲一同唱和後、一同最敬禮裏

に入御遊ばされ、次で式場より、還御あらせられた
るが、君か代奏樂尙ほ止まざる中に、第一線に列せ
し人々の續々退散したる事はれなり。申す迄もなく
君か代の奏樂は神聖なり。例令、御還幸後とは申せ、
奏樂中は特に敬度の態度を以て、奉送せねばならぬ
道はこの列にありし陸軍上長官等十數名、最後まで
不動の姿勢を以て敬意を捧げ居しは、當然のことな
がら大に人目を惹きぬ。若し望み得べくんば、斯か
る盛式の場合、單に萬歳唱和に止めず、奏樂に連れ一
同君か代をも高聲に唱和し、彌が上にも莊嚴を加ふ
べきであつて、市民は平素其の心掛あるを要すと思
ふ。

續いて府廳内に於て、拜謁の盛典を擧げさせられた
余は白色記章組として二階府會議事堂に入りしが、
偶然にも第一列に位し、殊に有難き光榮を感じぬ。
當時一同と共に最敬禮を行ひ、畢りて直立體に復す
れば、勿體なくも實に幾歩の中に、陛下嚴然として
立たせ玉ひ、輕き御點頭を以て、我等を計へさせ